

戸山高校の4年間

1956年卒3F 小堀鷗一郎

都立戸山高校の名は成城学園中学3年になって級友塚原己成君から初めて耳にした。「医者ほど尊い職業はない。自分は医者になる。そのためには都立戸山高校に入り、東大の医学部を卒業する。君もそうすべきだ。」それも悪くはないと考えた私は親に相談することもなく、成城学園高等学校進学をやめ、アチーブメントテストを受けることとした。取り敢えず塚原君の父上が私を連れて経堂の柴田先生宅に相談に行くことになった。駅から降りて真っ暗な畦道を提灯の明かりを頼りに歩く塚原父の姿は鮮明に記憶に残っている。主従2人（塚原父は結核を患った柴田先生の主治医）は床の間を背にして座った。四中・戸山高校の卒業生でこのような接遇を受けたものは、他にいないのではないかと思われる。柴田先生は厳かに千歳、松原、明正3校を受験、その後戸山高校の編入試験を受けてはどうか、と提案された。私の中学3年間の成績（私の関心外にあり、従って両親も関知しなかった：通分なるものを知らず $1/2+1/3=2/5$ と信じていた。）が塚原父から伝わっていたのであろう。当然のことながら、柴田先生の指示された3校に落ち、塚原父の義弟が校長を務める國學院久我山高校に入学、1年生の夏の戸山高校編入試験を受けたが、（これも当然のことながら）また落ちた。2学期からは私立城北高校に編入したのだが、7、8月の2か月は空白期間を埋めるため、目にかけてくれた成城学園の国語の先生が籍を置くように取り計らってくれた。その折のハガキに「紅い花ばかり咲き次ぐ暑さかな。2学期から成城に戻ってくるかい？」とあった。雅やかな世界である。城北高校1年生修了時点で2回目の編入試験に臨み今度は成功した。成功はしたが、藤塚先生担任のA組の学業レベルに到底ついて行ける状況ではなかった。阿藤が手紙を寄越した。そこには「君が死んでも世の中は全く変わることなく動いている。」とあった。同じころ級友の大森が自死を遂げたこともあり、私のことも心配してくれたのであろう。数年前大島を通じてお礼を言って貰おうとしたが、阿藤本人は全く記憶していなかった。同様の学業成績低迷状態は3年F組になっても、卒講（卒業生講習会）1年目になっても変わるところはなかった。卒講1年目には先に一橋大学に入っていた南の家でビールなど飲み、大島宅の闇鍋会などに加えて貰って憂さを晴らした。不貞腐れて他の級友のように参考書など手にせず、下敷きをセーターの腹に入れ、消しゴム付き鉛筆を2、3本耳に挟んで、手ぶらで模擬試験に臨んだ。教室の入り口で柴田先生に「鎧みたいだね。」と言われた。卒講2年目になると旧友の姿は一人もいなかった。二浪、三浪の級友もいたが、彼らは全て他の予備校に行ったからである。

私の両親は「魂の自由の尊さ」を身をもって私に教え込んだ。私の職業人としての60年（外科医40年と在宅診療医20年）はまさに魂の自由を謳歌した60年であった。その60年間に可能にしたのは、戸山高校の不自由な4年間（正規の高校2年間と卒講2年間）である。